

大鹿スケッチ

— 第44号 —
2014年 06月
〈 発信者 〉
前志満 くみ
〈 提供 〉
旅舎 右馬允

突然、関東甲信越地方が梅雨入りしたと思ったら、梅雨を忘れるような天気がいっぱい続いている。湿気を嫌うお蚕様にとってはいいタイミングで雨が遠のいてくれている。

信州大鹿村軒の養蚕農家 紙谷正さん(八八)の蚕室では上簇間近の蚕が桑を食んでいる。一匹一匹はちっぽけでも約三万頭の蚕の食事の音は迫力がある。「ジャワジャワジャワジャワ」と、聞き方によっては涼やかな音が響く。青臭い桑の葉の匂いはなんとなく懐かしい。の四〇年代後半からS五〇年初頭、私が住んでいる近くにもお蚕様を飼っている家がありよくお蚕様をブローチ代わりに胸元に付けてはしゃいでいたことを思い出す。

良質な繭の生産地として知られる飯田下伊那地方で最も生産量が多かった。一九六八年(昭和四三)年、生産農家は一万二六〇戸を数えたがその後年々減少。今年はず年から三戸減り、一、二戸が続いているという。

もったいない野菜便からみる

大鹿村の風景

二〇〇九年から近所のおくあり、土地を荒らすことを最も嫌う。彼らは季節折々、小まめに畑の手入れをし立派な野菜を育てる。農村において六〇歳以上の世帯になると「家族二人」という世帯は少なくない。二人で生活していくの。それでも余ったり、忙しなくて収穫ができず旬をに広すぎる土地は「自給」を大前提とし専ら「維持管理」に重点が置かれている。は畑の脇に捨てられ、肥やご先祖様が苦勞して獲得してきた「尊い土地」というのが地方の意識の中に根強

くあり、土地を荒らすことを最も嫌う。彼らは季節折々、小まめに畑の手入れをし立派な野菜を育てる。農村において六〇歳以上の世帯になると「家族二人」という世帯は少なくない。二人で生活していくの。それでも余ったり、忙しなくて収穫ができず旬をに広すぎる土地は「自給」を大前提とし専ら「維持管理」に重点が置かれている。は畑の脇に捨てられ、肥やご先祖様が苦勞して獲得してきた「尊い土地」というのが地方の意識の中に根強

つたいない野菜」を送って欲しい。テーマは「ひと集落いち記者」。「もったいない野菜」が取り持つ縁を大切に村の季節の移り変わりや農村の生活事情をシェアし、ミニマムな継続を追求している。事務局では「もったいない野菜」の発送の他に農作業のお手伝いボランティアも要望があれば随時行っている。二〇一〇年からは紙谷正さんのお田植の手伝いを毎年させていた。紙谷さんは、六反五畝ほどある田んぼにはぼ一人で向かっている。今年も例年より三日遅い五月一八日から田植が始まった。田んぼに何と紙谷さんは開口一番「お父さんはもう駄目だ」と二条植の田植え機を押しながら顔をくしゃくしゃにして言った。珍しいなと思った。紙谷さんはとても我慢強く、人前が弱音など言わない人だからだ。元気そうに見えるも八八歳。相応の体の反応だろう。どこが辛いのかと、足元がふらつくという。大地をしっかりと踏みしめてきた足も時が来ると重力に逆らえなくなるといのが地球上の現実だ。二〇一三年の冬、「もったいない野菜便」の野菜を育ててもらっている農家が軒並み病に倒れた。四軒中一軒は耕作範囲を縮小することを決めた。「故郷に錦を飾る」という言葉があるが、今の七〇代から上の世代は自分の子供達に経験してきた苦勞を負わせまいと進学させるために一生懸命働き「都会で錦を飾れ」と送り出した。彼らの子供たちはちやうど高度経済成長期の真つただ中にいた世代である。地方では次世代不在の家が多くなる一方で、都会から農村の生活にあらがれて移り住む人も少なくない。ただ、農地の利用という観点から見ればどうだろうか。自分も含めて「農」のある生活に憧れは持っているものの、個人では農村景観を維持するような大きな範囲は到底耕作できないだろう。

移住してきた友達は村の印象について「集落と畑と山のバランスがちょうどよくて心地いい」と感想を話してくれたことを思い出す。今後そのバランスは果たして維持していくことはできるだろうか。

五月三日今年もお蚕様を迎えようとしている。高山がそびえ、その向こうが「高山裏」。我らが赤石岳。前茶臼の崩壊を里から見上げる機会が多いが、上から見下すのも新鮮。ゲイナミックな「生きている崩壊」を実感。前茶臼からはしばらく混んだ林を行く。道はない。今回一番のピークの奥茶臼山(標高二四七三・九三)を通過すると、しばらく緩やかな尾根が続く。東に延びる水平尾根には残雪もあり、ずぼずぼしながら進む。カモシカは器用にずぼずぼと歩いているので、途中から彼にした



大鹿 HeatBeat 第42回

紙谷 正さん(88)
風景と共に大鹿人の生活を紹介します。

六月八日ほんの二、三日前まで食べごろだった大根が茎をのびして花芽をつけていた。梅雨時の緑たちの成長は眼を見張る。春まきの大根や蕪がおわり、第二弾の蕪、大根が成熟し、畑の一角ではインゲンやしとうが間もなく収穫の時を迎えようとしている。

六月八日ほんの二、三日前まで食べごろだった大根が茎をのびして花芽をつけていた。梅雨時の緑たちの成長は眼を見張る。春まきの大根や蕪がおわり、第二弾の蕪、大根が成熟し、畑の一角ではインゲンやしとうが間もなく収穫の時を迎えようとしている。

六月八日ほんの二、三日前まで食べごろだった大根が茎をのびして花芽をつけていた。梅雨時の緑たちの成長は眼を見張る。春まきの大根や蕪がおわり、第二弾の蕪、大根が成熟し、畑の一角ではインゲンやしとうが間もなく収穫の時を迎えようとしている。